

要旨

フロンティアとトランス・フロンティア —前近代アフガニスタン史の研究—

稲葉穰

本論は現在のアフガニスタン・イスラーム共和国を中核とし、その隣接地域をも含む空間を、異なる文化世界、歴史世界のフロンティア、接点（コンタクト・ゾーン）と見なし、とくに前近代におけるその歴史を考究しようとするものである。現在のアフガニスタン・イスラーム共和国は、東と南をインダス川流域に伸びるパキスタン、西をイラン高原の大半を占めるイラン・イスラーム共和国、北西および北をトルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン各共和国に画された内陸国家（国境線としてはインド、中国とも接している）である。国土の大部分は山岳地帯あるいは高原地帯で、多くの地域は海拔600mから3,000mの範囲にある。海拔300m以下の土地はアム川左岸、アンドフーイからアクチャにいたる地域のみである。地質学的に見れば今から4500万年前、プレート移動によってインド・プレートが北上し、ユーラシア・プレートに衝突した結果、インド亜大陸の北側に弧を描くように高い山々が形成されたが、アフガニスタンはこの弧状の山岳の西の端、それがイラン高原と接していくつもの支脈にわかれる場所にある。このような山岳の存在は、とりわけ前近代において人や物の移動、輸送を様々な形で制約したのであり、それゆえイラン高原を中心とする西アジアと、インド亜大陸である南アジア、およびアム川以北・以東の中央アジアとは、それぞれ異なる文化世界、歴史世界として発展をとげてきたと考えられてきた。しかしながら、あらためて言うまでもなく、これらの世界は、隔てられると同時に様々な形で交流してきたのである。そのような交流のチャンネルこそ、前近代における道の存在であるのだが、古来より西アジアと南アジア、中央アジアと南アジア、さらには中央アジアと西アジアの間の接触と連絡は、この歴史的アフガニスタンの山岳地帯を環状に巡る「道」を通じて行われてきた。ちょうどロータリー式交差点のように、ユーラシア大陸に東西南北に張り巡らされた主要交易ルートはこの環状の道、に一度合流し、再び各方面へと伸びていった。本論文は、この境界領域の歴史を種々の資料よりたどり、前近代における境界領域＝フロンティアとそこを巡る交通路のあり方、およびそれがこの地域の歴史に与えた影響を探るとともに、いわゆる歴史的フロンティア研究のための比較対照として同地を位置づけ、分析しようとするものである。

扱う対象は空間的には現在のアフガニスタン国家の領域を中心としつつも、さらにその周辺地域におよぶ。この、北はバクトリア、西はホラーサーン、東は北西インドにおよぶ領域をいま仮に「歴史的アフガニスタン」と呼ぶ。これは、文化世界、歴史世界の接点、境界領域のこの地域を通史的に指し示す適切な歴史的名前がないためである。一方本論で扱われる

時代範囲は、西暦で言えば六世紀から十二世紀、歴史的事象に絡めていうなら、エフタル期からモンゴル時代前夜までということになる（一部モンゴル時代以降にも説き及ぶが）。言うまでもなくこの間、歴史的アフガニスタンの全域がイスラーム教徒による征服を受けており、これを軸とするならばイスラーム前夜から初期イスラーム時代、が主な対象ということになる。

以下、本論の構成と内容を概述しておく。

まず序章「フロンティアとしてのアフガニスタン」では、本論の題名にもあるフロンティアとトランス・フロンティアについて、本論がどのような含意をもってこの言葉を用いているのか、特にヒンドークシュ山脈という山岳地帯を対象としてどのような様相を論じようとしているのかを述べる。そこで特に注目するのは、フロンティアの持つ分離的および包摂的な二つの特質、あるいはNicola Di Cosmの指摘する、歴史的フロンティアの二つの様態、すなわち歴史的構築物としてのフロンティア（政治や軍事活動の成果として成立する境界）と、それとは異なる心理的なフロンティア（「文明」の間のフロンティア）の存在であり、これらを手がかりとしてこの問題を考えることを述べる。

第一部「フロンティアの政治集団」では、ポスト・クシャーン期からイスラーム時代初期に到る時期にヒンドークシュ山脈周辺に興起した諸政治集団、国家について、様々な資料を用いてその政治史を明らかにすることを試みる。そもそも1990年代頃まではこの地域の具体的な歴史はほとんど知られておらず、いわゆる通史的な記述も困難であった。第一章「ポスト・グプタ期の政治集団」では、近年貨幣学の研究の進展に基づいて区別されるようになったこれらの「政治集団」がどのようにして史上に登場するのか、互いにどのような交渉を持ったのかについて、既知の文献資料や考古資料を援用しつつ検討する。第二章「カーブルシャーの時代」においては七世紀から十一世紀にいたるまでアフガニスタン東部からガンダーラ方面を支配した王権について、その起源、活動、派生勢力、およびイスラーム勢力との関係を論じる。中世以降の特にヨーロッパ史においてしばしば「フロンティアの軍事化」という現象が指摘される。政治的軍事的境界線としてのフロンティアの両側が軍事化し、しばしば独自の動きをする軍事集団、軍閥を形成するという事象であるが、十世紀以前のこの地域、特に東部アフガニスタンが、それぞれの文化世界、歴史世界の縁辺として、様々な種類の軍事集団が跳梁跋扈する場所であり、結果として時に破壊的な力を持つ軍事集団が生み出されることがある、ということの実例が示される。

第二部は「フロンティアの帝国」と題し、ガズナ朝の建国からセルジューク朝の支配、ゴール朝の興亡までの時代の歴史を解明する。第三章「ガズナ朝の出現とフロンティア」では、八世紀から十世紀にいたる間の、ヒンドークシュをまたぐ、イスラーム勢力と非イスラーム勢力の興亡のありようを解明し、さらにその成果に立脚して、十世紀半ばにアフガニスタン東部、ガズナのまちを征服したAlpteginの行動がいかなる形でフロンティアと関わるの

か、Alpteginの後、同地に成立したガズナ朝がどのようにして支配領域を拡大したのかを論じる。第四章「ガズナ朝、セルジューク朝、ゴール朝とインドへの道」では、1040年以降のガズナ朝とセルジューク朝の支配領域がどのようにして接し、それは防御的に意味を持ったのか否か、および、アフガニスタン中央部の山岳地帯から登場したゴール朝の発展のダイナミズムを論じ、さらにガズナ朝や、ゴール朝など北インドへ進出した勢力が物理的にどのような道を辿ったのかを解明し、アフガン高地とインダス中・下流域の間の地理的障壁とその通行可能性を考察する。特にガズナ朝の成立期以降、しばらくの間、この地域は軍事化した集団が、それまでのように周縁的でephemeralな存在で終わらず、強大な政治勢力を維持し、このフロンティア地域に巨大な権力中心が生じたことが指摘される。

第三部は「フロンティアと都市」と題して、ヒンドークシュ山脈の南側、現在のアフガニスタン東部における政治権力のあり方と権力中心の遷移が、この地域の「フロンティア性」といかに関連していたかを論じる。第五章「東部アフガニスタンにおける大都市の変遷」ではカーピシー、カーブル、ガズニをとりあげ、それぞれが歴史のどの段階でどのように発展したのかを辿り、この地域の地勢的特徴と関連付ける。重要なのはこの地域に成立する社会の経済基盤がいかなるものであったのかについての考察であり、限定的な農業生産力のゆえに、商業公益の利が大きな意味を持ち、結果として政治軍事情勢の変化が劇的な地域中心の変化を産み出したという特徴を指摘する。

第四部は「フロンティアの文化と社会」と題し、フロンティアにおいて生じた文化融合、文化接触、文化衝突の事例を探る。第六章「バーミヤーン大仏のイスラーム史」は、残念ながら2001年に爆破されてしまったバーミヤーンの二体の大仏とその周囲の仏教遺跡が、イスラム時代の文献資料の中においてどのように描写されてきたか、そしてそれが時代を経るにしたがってどのように変化したのかを考察する。第七章「ヘラートのカーマ・ストラ」では文献資料の記述を手がかりに、フロンティアにおける文化の越境に絡めて、イスラム社会内部、イスラム法内部、イスラム文化内部の越境的現象がどのようにして起こったのかを論じることを通じ、フロンティアであるからこそ生じる、トランス・フロンティアな現象の性格と権力性を浮き彫りにする。

第五部は「フロンティアを超えて」と題し、南アジア、西アジア、中央アジア、東アジアといった境界を越えて活動した人々の活動から、フロンティアの持つポテンシャルを描き出すことを試みる。第八章「悟空（車奉朝）の入竺」は、751年に唐から罽賓への使節団の団員としてガンダーラに赴き、そのままインドに留まって受戒した悟空の行伝に見える、使節団の経路を分析し、751～53年という時期にムスリムの支配領域と吐蕃支配領域のフロンティア（それはそのまま中国と吐蕃、中国とムスリム世界のフロンティアともなる）がどのように構成されていたのかを考える。第九章「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」は、750年代後半以降、安史の乱に揺れる唐の軍隊に参加し、ウイグル兵とともに活躍したとき

れる「大食」の事例をとりあげ、彼らがどのような者たちであり得たのかを、イスラム世界側の事情を分析しながら考察し、物理的にフロンティアを超える人や物の動きがどのようなインパクトを他の世界にもたらしたのかを示す。第十章「ヒンドークシュと二つのフロンティア」は、これまでの議論を承け、ヒンドークシュ山脈が歴史的にどのように南北を結んできたのか、逆にどのような場合に障壁として意識されたのかを、特に驚異譚文学の辞令の分析から考察し、結果として Di Cosmo の指摘する二種のフロンティアに類似するものが、前近代のアフガニスタン、特にヒンドークシュ山脈周辺において確認できることを証する。

最後に本論の各章における議論を、フロンティアの特性という角度から再度まとめなおし、あわせて今後ありうべきフロンティア研究の視角や手法についての展望を述べて論文を終える。

(約4,300字)